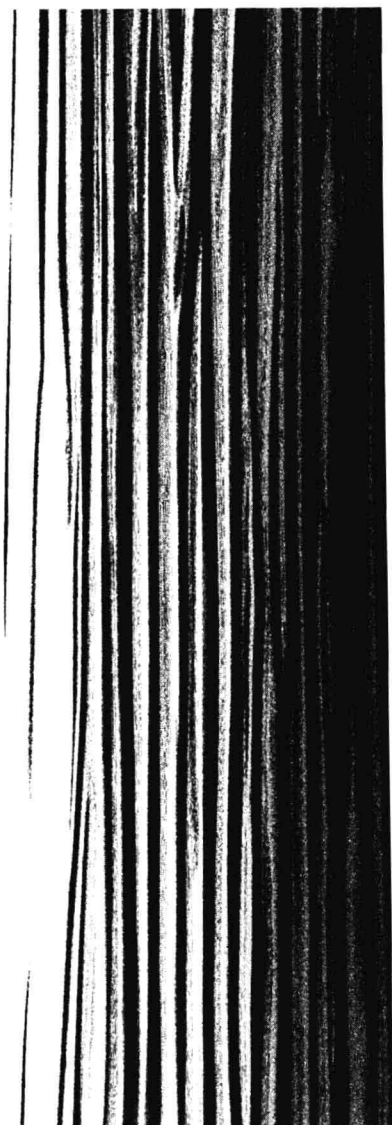




岡熊臣

轉換期を生きた郷村知識人

一幕末国学者の兵制論と「淫祀」観

張憲生
Zhang Xianheng



序論

9

一——問題意識と課題 9

二——先行研究について 12

三——問題点の整理 18

四——本書の構成と研究の特色 20

序章 生い立ちと思想形成

23

第一節 家と生い立ち

25

一——岡家の歴史 25

二——「家格」と主体意識の形成 26

第二節 精神的巡礼としての旅

29

一——江戸遊学と国学への転回 30

二——「焚詩」の象徴的な意味 36

三——青年から中年にかけての旅 41

四——平田門への入門事件 50

第三節 学問と教養の基礎

55

一——岡家の蔵書目録 55

二——引用書目録 59

第四節 生涯の時期区分

64

むすび 65

第一章 『兵制新書』の研究（一）

成立背景と作品構造を中心に

67

第一節 成立背景と著述動機

「鈴録^{けんろく}」との関連について

70

一 「兵学思想受容の方法」

70

二 「家格」の復旧を求めて

74

第二節 『兵制新書』の構造

「幽」・「顕」、「正」・「奇」について

77

一 「幽」と「顕」

79

二 「正」と「奇」

81

むすび

88

第二章 『兵制新書』の研究（二）

政治思想を中心に

89

第一節 現状認識と郷村改革

「神随^{かみながら}なる大道」と現実の乖離

92

一 「同時代状況の認識」

92

二 「庄屋制度の改革」

96

三 「郷村行政の改革」

102

第二節 「教化」論 倫理秩序の再建

106

一 「忠」・「孝」

106

二 「教化」

110

三 「君上たる人」の心得

116

四 「修身」・「齊家」

120

五 「幽府の刑罰」

123

第三節

「制度」論 「封建」と「郡県」

126

一——キー・ワードとしての「封建」

126

二——「意見十二箇条」の再解釈

128

三——「国郡境界」論

136

むすび

143

第三章

『兵制新書』の研究(三)

兵制論を中心に

147

第一節

戚繼光の兵学とその影響

近世東アジアにおける「戚法」

149

一——「戚法」の誕生

149

二——「壬辰丁酉倭乱」における「戚法」

151

三——「戚法」と『鈴録』

152

第二節

古代兵制と中国兵学との間

明代兵書受容の態度

155

一——古代兵制の特徴

155

二——中国兵学の受容におけるジレンマ

159

三——「古今戦法」の変化

163

第三節

新しい兵制の構想 「戚法」から脱身分制志向へ

168

一——操練の法

168

二——武器の選用

172

三——選兵と身分制

176

むすび

180

第四章 岡熊臣の「淫祀」観 「淫祀」論批判を中心に

185

第一節 問題の所在 「淫祀」批判の新しい読み方を目指して

189

- 一——「淫祀解除」とは何か 189
- 二——「淫祀」論批判はいかに読むべきか 191

第二節 「淫祀」への態度 岡熊臣と岩政信比古（1）

194

- 一——山県太華の「淫祀考」をめぐる 194
- 二——近藤芳樹の「淫祀論」をめぐる 198
- 三——岩政信比古の態度 207

第三節 吉田神道との関係 下級神職をめぐる社会関係

213

- 一——吉田家の神職支配 214
- 二——岡熊臣の吉田神道観 219

第四節 下級神職への態度 岡熊臣と岩政信比古（2）

225

- 一——岡熊臣の場合 225
- 二——岩政信比古の場合 226

むすび 231

第五章 「廃学」と晩年の公的活動 津和野藩学への参画を中心に

235

第一節 「廃学」をめぐる「物学びする」者の情念

236

- 一——後期国学の政治志向 236
- 二——「廃学」の意味 238

終章

255

第二節

藩学への参画

その背景と活動の内容

246

三——「廃学」の背景 244

一——養老館の教学改革 246

二——養老館での教学活動 248

三——終末 252

むすび 254

一——結論 256

二——今後の課題 264

注釈

267

あとがき

289

付録

291

岡熊臣年譜

292

著作活動年表

310

『兵制新書』目次対照表

313

参考文献

334

索引

343

序論

一——問題意識と課題

本書は、幕末の津和野藩国学者の岡熊臣おかぐまおみの思想と実践を取り上げて考察するものである。その目的は、近世国学の復古思想の流れを汲む彼について近世後期という時代背景の下でその思想形成の過程を分析し、その思想の独自の側面に光を当てて構造的に解明することである。また、その実践活動について、伝記資料に基づいて環境や時代背景などを考えながら、復元してゆくことも目的の一つである。これらの作業を通して過去の研究でまだ解明されていない彼の思想と実践の特徴を明らかにし、彼の新しい全体像の構築に一步近づきたい。

岡熊臣かのあぐんおみ（二七八三—一八五二）は、石見国鹿足郡富長八幡宮宮司岡忠英の長男として生まれた。初め本名を忠栄といい、後熊臣と改めた。東嶺を字とし、大瓠、桜舎などと号した。幼少期から漢文や和歌などの家学の薰陶を受け、長じてから国学や兵学などを修めた。著書には『兵制新書』や『日本書紀私伝』などがある。神官として著述と教育を行なったあと、最晩年の嘉永二年に津和野藩学の国学教師に登庸され、公的教育にも参画した。

岡熊臣に関する研究は少ない。その僅かな論考を通説とみなすならば、いわゆる近世国学の系譜図における彼の位置はそれほど突出した存在ではなく、国学ないし幕末思想史に重要な影響を与えたとは考えられていない。彼は決して宣長や篤胤などと並ぶ頂点的な思想家ではなく、むしろ早くから「折衷」家という名で呼ばれたように、あくまで宣長や篤胤の影響を受け、その思想を忠実に受け継いだ継承者というイメージが強い。明治四十年に彼は従四位を贈られ、その後、彼の「敬神尊皇」精神を顕彰する目的の著作が幾つか著された。以来、彼の尊皇家の側面がクローズアップされ、

彼に関する通説に一部影響を与えている。

岡熊臣に関するこうした通説とイメージの形成には、それなりの原因がある。彼の思索と実践活動はほとんど津和野藩という限られた範囲にとどまっていた、幕末の風雲に際して立ち振る舞った華々しいストーリーはあまりなかった。また、彼の著書は生前にほとんど公刊されなかったで、同時代のごく限られた範囲にしか影響を与えなかった。実際、彼の主要著書は死後から一九八〇年代半ばまで一般には見ることが困難であった。そのため、従来の説を検証することはほとんど不可能であった。これらの事情が重なって彼に関する通説は検討されることなく今日に至ったのである。

しかし、『岡熊臣集』⁽¹⁾が公刊された現在では、彼の思想と実践を顧みることが可能となった。彼に関する先行研究を調べてみると、現在の通説は『千住の住処』⁽²⁾などの幾つかの著書をもとに出来上がったことが分かる。だが、『岡熊臣集』を読み直すと、彼の思索活動はむしろ同時代の重要課題をほとんど包括する多様性を持ち、そこには質量ともに近世思想史に新たな認識を付け加えるのに十分豊富な内容があることに気づく。これらの内容に対する考察を通して彼の新しい側面を照らし出すことが可能になり、それらの側面と既成の岡熊臣像との間に生じる乖離や矛盾について新しい解釈を下すこともできる。さらに、一九世紀半ば以後の津和野という僻地において行われた多彩な思想的営為自体も注目すべき現象であり、それを可能にした時代背景の考察もおのずと課題となるだろう。まとめていうと、現在の通説に安住せずに岡熊臣を捉え直すことは、課題として十分に現実性がある。にもかかわらず、彼に関する本格的研究は、現在のところまだない。これはなぜだろうか。

幕末国学の思想言説と実践活動に関する過去の研究状況を眺めてみると、主要な思想家と活動家については研究し尽くされている観があるが、一方、明確な意味付けがなされていない周縁的な思想家はまだ多く存在し、これらの人物に対する関心が不足している傾向が見受けられる。周縁的な存在は精々主要な思想家研究の裏付けとして部分的に取り上げられる程度にとどまっている場合が多い。佐野正巳はその著書『国学と蘭学』⁽³⁾の中でこの傾向への批判の意味を含めて岡熊臣研究についてこう指摘したことがある。

近時（昭和四十年末頃―張注）ようやく国学の諸問題が盛んに論ぜられるようになったものの、特定の国学者の

研究に限られ、西石見の山間僻地の生んだ国学者（岡熊臣¹張注）などを黙過する傾向にある。現に地方から中央で活躍した人の多くは研究されて、全集にまで作られ、あまねく人に知られるようになる。たとえば、この熊臣と交渉のある野之口隆正などはそのよい例であろう。僻地に埋もれた人を発掘してこそ国学の本質にかなうのである。しかし、最近の国学研究の風潮は偏狭な日本主義回帰に堕して行くのは好ましくない。⁴

佐野がこの指摘をおこなったのは昭和四十年代の末頃であり、日本が戦後の高度経済成長を続け、世界から注目され始めた時期でもある。その少し前の維新百周年を機に、日本近代国家の起点である明治維新に対する関心が高まり、幕末維新の政治だけでなく、そこからさらに遡って近世の歴史・思想・文化を研究しようという動きが強まった。その中で、神道およびそれと密接に関連のある近世国学は日本固有の宗教や思想と見なされ、明治維新と近代日本との連続性、さらに戦後日本の高度経済成長の要因探しという問題意識から研究が進められてきた。

こうした背景の中で、近代以来作りあげられた、「制度」としての国学研究の下で次々と見るべき成果が上げられてきたが、一方、近代日本国家のアイデンティティを作り上げるのに寄与した特殊な思想・文化という認識が強まるにつれ、近代日本の「始まり」の「語り」を構成する国学研究の中から、一部「日本主義」の色彩を帯びた言説が登場してきたのもまた自然な勢いであろう。³ おそらくこのような背景から、大岡隆正のような、幕末国学を代表する人物は脚光を浴びたが、周縁的な存在と見なされた岡熊臣は取り上げられずに見過ごされてしまう、という佐野の指摘した状況が生じたのではないかと考えられる。

だが、こういった現状はかえって岡熊臣研究の重要性を筆者に一層強く意識させる。筆者が彼を取りあげて研究する第一の理由はここにある。次に、何らかの形で彼に言及している先行研究を取り上げて検討し、問題点を整理することにしてしよう。

二——先行研究について

明治四十年五月に岡熊臣に従四位が贈位されたことを機に、彼に関する伝記が書かれた。いうまでもなく、当時の風潮の下で、これらの伝記の目的は専ら彼を神道史上の人物として顕彰しようとしたものであり、思想史の対象として取り上げて客観的に研究するものはほとんどなかった。

戦前において岡熊臣に関する本格的な研究がほとんど皆無に近い状態の中で、村岡典嗣による短い言及は注目すべきである。村岡典嗣は日本思想史研究の観点から、幕末の神道学者・国学者を取り上げ、神道思想の系譜づくりをおこなった。村岡は岡熊臣について次のように述べている。

等しく神典の研究に携わりつつも、神典の語義の文献学的闡明よりは、寧ろ、少なくともその結果から見て、神典によつて、自家の神道学を樹立しようとしたといふべき一派が生ずるに至つた。即ちこれ、第四の、特に所謂神道家の一流で、之に属するものには、平田門なる佐藤信淵、岡熊臣、六人部是香、野々口隆正、権田直助、矢野玄道、及びやゝ学系を別にせる久保季茲、鈴木雅之等がある。⁽⁶⁾

終りに、岡熊臣は石見の学者で、千家清主に学び、嘉永四年に歿した人で此の二人（矢野玄道と権田直助―張注）よりは一代先輩であるが、彼は特に千住のすみかを著し、幽冥の問題に就いて論じた。即ち靈魂には本つ霊と別つ霊とがあつて、本つ霊は死後善惡に関せず、根国を経て黄泉に行き、他の霊は長く止まつて幽冥界に入り、善惡によつて審判さるゝと言ふのである。蓋し本居説と平田説との間に立つて折衷を試みんとしたもので、また、古学神道の發展上の一つの産物である。⁽⁷⁾

村岡は、明治期に唯一刊行された岡熊臣の『千住の住処』を取り上げ、いわゆる「幽冥」の問題に触れ、「本つ霊」と「別つ霊」という彼の靈魂觀をいわゆる復古神道の發展の文脈と関連させて、「本居説と平田説との間に立つて折衷を試

み」るものと位置づけた。また彼を平田門なる佐藤信淵、六人部是香、大国隆正などと一つの流派に入れて考えるべきだと述べた。村岡の見方は岡熊臣に関する通説の基礎を作り、今日の研究にもなお一定の影響を与え続けている。

ただ、本書の序章で詳しく考察するが、岡熊臣を「平田門」とすることは、考察の前提として問題がある。また、そこから導かれた次の結論も、今日から見れば、修正する余地がある。すなわち、岡熊臣は「神典によつて、自家の神道学を樹立しようとし」、また「本居説と平田説との間に立つて折衷を試み」というが、本居説と平田説に対してそれぞれどのような態度で接し、その間にどのような思想的ドラマがあつたのかについて、これ以上の言及はなかつたのである。

村岡の研究では、岡熊臣の宣長や篤胤との間にあつた思想的差異を問題にせず、「折衷」の一語でその特徴を捉え、復古神道との連続性を強調する傾向が目立つ。日本近代の誕生にもなつて登場した神道思想史を築き上げる立場にあつた村岡にとつて、このような方法的選択はあるいは極めて自然なものだつたかも知れないが、現在から見ると、一つの系譜上にあるように見える人物たちの思想の間に存在した差異こそ、人物の思想を捉える格好の糸口になるのではないかと思われる。

他に注目すべき戦前の研究者としては、第二次世界大戦の末期から戦後にかけて、岡熊臣の生家に泊まり込んで資料の収集と整理に取り組んだ堀江秀雄⁸⁾があつた。この作業は後の『岡熊臣集』の編集と刊行の基礎をなすものであり、記しておくべきである。

松本三之介はその著書『国学政治思想の研究』⁹⁾の中で、人民の教化を説く幕末の国学者として岡熊臣を取り上げて彼の人民観に触れた。松本は岡熊臣の『兵制新書』の一節を引いて次のように述べている。

人民教導の要を説いてやまなかつた彼ら国学者は、人民に対していかなる態度をもつて臨んだか、その教化の基本方針は何であつたろうか。篤胤の門人岡熊臣（天明三年～嘉永四年、一七八三年～一八五一年）の次のような言葉はわれわれの設問に対する端的な回答を提供してくれる。彼の『兵制新書』はこう述べている。「大体中以下

百姓町人工商にいたるまで、皆只以呂波文字、平仮字、俗様の文字を讀書よみかことをのみ習はしめ、左にも右にも上公の御為、吾生国の為にとて、此世に生まれ出来たる下万民の身体なれば、たとへ、各身軀妻子眷屬財宝をば粉にはたられても、公儀の御為には、我等が遣道具や、米錢を取り遣ふに等しきものと云道理一条を本旨に含で、其趣旨を朝夕怠らず、老少男女の貴賤共に教示し、聞諾なひ保たしめて、其實行真理忠孝の大本に、自然と心の趣き暁り信従するやうに、いつもいつも云聞すべし、ひたもの此本元の道理を教ふるの外には、學問をばさすべからず」、『兵制新書』卷一上」と。彼らの人民觀については、これ以上説明を加える必要はあるまい。⁽¹⁰⁾

岡熊臣を篤胤の門人とする点では、通説を踏襲している。それはともかくとして、上の引用から、彼は愚民政策を提唱した国学者と結論付けられている。岡熊臣にこの側面があつたことについては筆者も同意する。ただ、『兵制新書』からの引用部分のすぐ前と後にある二つの文章をもあわせて見ると、少し疑問が生じる。たとえば、幕府・諸大名に勤める役人小吏から鄉村を支配する庄屋名主らまでの各階層の學問について、岡熊臣は次のように述べている。

抑今世は文字を習ひ、章句を讀で、儒學をも心がけ、厘々經書子史の端をも解心得て、訴訟裁斷の考へ合せにも、自他得失の前轍にもするほどのことは、諸家の年寄り老中奉行以上の司職役吏には、少は便宜の助けにもなるべし。其より以下の諸役人小吏、或は在地町方の支配人庄屋名主など云類は、更に更に大学一卷も誦に及ばず、凡て儒仏の説などをば聽聞することをも制せられ、唯々上諭解示会得させ、文字は書狀の贈答、帳日記の文言通用ばかりの手習せさせ、算法も制度に及ばず、年貢の取立、諸勘定の間に合ふほどにて然るべし。⁽¹¹⁾

実は「中以下百姓町人工商」だけでなく、支配する側のこれらの階層に対しても學問を制限しようと提言をしていたのである。彼はさらに武を本業とする「中品以下の武士」に対しても、無用な讀書をやめ、兵法武術に専念するべきだと主張する。

別して中品以下の武士と云ほどの者、無益の儒教異教の説に泥み、不要の雑書を読看る余暇もあらば、唯専ら此大本の真理を辨へ曉せさせて、主要とは馬に乗り太刀を振り、槍を握り、弓鉄砲を放ち兵法武術の現業に達し……。(12)

ここで見たのは、「中以下百姓町人工商」は「皆只以呂波文字、平仮字、俗様の文字を讀書よみかことをのみ習はしめ」るべきだといった愚民策と平行するように、支配側にあるはずの「諸役人小吏」と「在地町方の支配人庄屋名主」や、さらに「中品以下の武士」を「儒教異教」の書物から遠ざけるべきだとする、上で見たのとはほぼ同様の主張である。言い換えれば、「愚民策」は支配側の一部にも適用すべきだ、ということになる。すると、岡熊臣の発言を愚民観と解するだけでは、整合的に理解し切れない問題が出てくる。この問題を解決するためには、彼の政治思想全般にもう一度立ち戻って検討せねばならない。

日本文化史研究家の佐野正巳は、岡熊臣に関する伝記的・書誌学的研究を『国学と蘭学』にまとめて昭和四十八年に刊行し、岡熊臣の存在に目を向けさせようとした。佐野の实地調査に基づいた伝記的・書誌学的研究によつて岡熊臣の人物像と活動の輪郭が描き出された。佐野は彼の生涯を四期に分けて、その中でとくに岡熊臣による宣長学の発展、さらに神霊研究および考証学的史学と民俗学的傾向に焦点を当てて伝記資料を交えながら論述した⁽¹³⁾。

先に見た佐野の引用文では、昭和四十年代における岡熊臣研究の問題点が指摘されたが、そこには少なくとも二つの重要な論点が含まれている。まず第一には「西石見の山僻地の生んだ国学者」の岡熊臣を「黙過する」ことの不当性に対する指摘であり、次は「最近の国学研究の風潮」に見られる「偏狭な日本主義回帰」傾向の指摘である。岡熊臣研究の現状を考えると、三十数年前になされたこの指摘は今日でもその有効性を失っていない。

また、佐野は宣長との思想的連続性を重視する観点から、岡熊臣の学問を宣長以来別々になされてきた古道研究と古典の文献学的研究という統一しがたい二つの側面を統一させて研究し発展させたものと評価している⁽¹⁴⁾。

『国学と蘭学』で提示された人物像は、それまでの固定的な岡熊臣像に修正を加えたことになり、とくに書誌学的な研

研究成果は後の研究者に益するところが大きい。

ただ、同書においては岡熊臣の著作についての立ち入った分析はほとんど行われていない。あるいはもともそれが目的でなかったのかもしれないが、いずれにせよ、彼の思想を知るために、『兵制新書』などの読解が課題として残っている。

加藤隆久は神道史の立場から岡熊臣を近世神道史上の重要人物としてとりあげ、その著書を整理して『岡熊臣集』として刊行した。『岡熊臣集』刊行の意義は彼を神道史上の人物として顕彰しようという編者の当初の意図にとどまらず、むしろ広く近世思想史研究一般に格好の資料を提供したことにある。今日、『岡熊臣集』においては岡熊臣の思想の全貌を知ることがほとんど不可能である。

加藤の研究を一読すれば分かるように、それは基本的には神道史という既成の枠内に止まっており、他の視点からの言及はあまり見られない⁽¹⁵⁾。そのために方法論的には必然的に岡熊臣の思想と実践の解釈に制限を加えてしまうことになる。

『岡熊臣集』を通読するとすぐ気づくのだが、彼の思想と実践全体はただ神道史という既成の学問の枠内にだけ閉じこめることが困難な部分が含まれている。そういった意味において、近代以後に登場した、制度としての言説の「神道史」研究とは異なる視点と方法を導入して岡熊臣を捉え直す必要があると思われる。

近年、幕末の民衆思想と民衆宗教に光を当てて新しい視点を打ち出した研究の中で、桂島宣弘の『幕末民衆思想の研究』⁽¹⁶⁾はとくに注目すべき成果の一つである。同書の第二章で、桂島は「復古神道と民俗信仰——岡熊臣の『淫祀解除』批判——」⁽¹⁷⁾という題で、幕末の長州藩で行われた「淫祀解除」をめぐる展開された彼の宗教思想について詳論した。同書で桂島宣弘は「幕末の思想状況は、既成知識人である儒家をのぞくならば、神々の世界の秩序をめぐる推移していったとわたしは考えている」⁽¹⁸⁾というふうに幕末の思想状況を規定した。また、「近代天皇制の底辺を考えるためにも、こうした幕末国学の世界観の検討は重要」⁽¹⁹⁾という問題意識を示している。